

## 9. 浜松まつり

東海地方という行政ゾーンがあるが、その対象は愛知・岐阜・三重・静岡の4県である。尾張生まれの私には岐阜県・三重県とは、なじみがあるが、静岡県と言うと多少離れた気分を持つ。しかし、愛知県でも東三河へ行くと浜松は同じ文化圏のような感覚を抱くらしい。豊橋は名古屋より浜松との交流が多いという話を聞いた。家康の影響力かもしれない。浜松市は平成の合併を経て人口も面積も県都静岡をしのぐ大都市となった。

5月3・4・5の3日間浜松まつりは開催される。浜松の歴史を引き継ぎながらも、新興都市の新しい文化も折衷させ、観客100万人以上を動員する新しいタイプの都市祝祭と観た。

因みに私が故郷の犬山祭保存会の会長に就任し、まず考えたのは祭の開催日の変更だった。4月初旬は別名菜種梅雨と呼ばれるように雨が多い。祭が雨にたたられると、曳山の

装飾品やら、道路の交通制限やら、観光客の案内やら、様々な対応や決定に主催者は苦慮する。当時若気の至りで、祭の何たるかも深く考えず、5月のゴールデンウィークがいいと祭関係者に日時の変更を提案した。提案は否決されたが、浜松まつりと言うと雨の心配はまずしなくていいだろうと勝手に思ってしまう。

「田舎は神が作り都会は人が作った」というが、浜松まつりは人が作った都市祝祭でありテーマがいくつもあるし、行政と民間との統制もとれている。神事や神話は漂ってはこないが、凧揚げ合戦に浜松の風土というアイデンティティは強く埋め込まれていると感じ入った。凧揚げの歴史はおよそ440年前当時、浜松を治めていた引馬城主飯尾豊前守の長男誕生を祝って城中高く凧を上げたのが始まりだと言われているが、現在は花火の合図とともに174町が一斉に、2帖から10帖の大凧を上げ、ケンカ凧とも呼ばれる糸を切り合う凧合戦を繰り広げる壮観な祭だ。

デザイナー川久保玲のコムデギャルソンというブランドがあるが、コムデギャルソンとは「少年のように」というフランス語である。凧揚げの会場で、遠州灘から吹いてくる潮風を肌を感じ、凧を上げる男達の熱気と歓喜のオイショ、オイショを聞いているとコムデギャルソンという私の内では今や眠ってしまった野生が目を覚ました。

凧は、初めて子供が生まれた家庭が、祝いに100万円以上になる費用を負担するという。岸和田のだんじり祭で、ある祭人が祭のために毎月貯金し、必ず150万散財するのだという話を聞いたことがあるが、祭とはそういうものである。エネルギーと富を一気に蕩尽する消費の快感であろう。観光業者や商売人が考える祭は放っておけばいい！

夜は夜で御殿屋台という83台の曳山行列がありこれはこれで賑やかな祭気分を盛り上げるが、私は浜松まつりの醍醐味は凧揚げ合戦に限ると思う。